シモマッチの
校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男　盛岡中央高校附属中学校副校長

第24回
Fさんと村上春樹氏と山折哲雄先生と

□ マラソン完走から精神の成長へ

Fさんという40代の看護師の友達がいます。彼女と私は、以前ある体質改善の体験プログラムを一緒に行ったことがあります。食生活を整えたり、運動をしたり、生化学や医学について学んだりなど、互いに励まし合いながら取り組んできた仲間です。

Fさんは、ほとんどランニングの経験がなく、最初は全く走れませんでした。ところが、ランニングを始めて1年後、彼女はホノルルマラソンに出場し、初マラソンにもかかわらず5時間台で完走するという目覚ましい結果を残されたのです。

Fさんからその秘訣について話を伺ったところ二つのことがわかりました。一つは、1年前に「ホノルルマラソンで完走する」と自ら宣言して以降、朝5㎞、夜10㎞を毎日走っていたというんです。彼女は、あえて宣言することによって、自分を追い込んだのだそうです。もう一つは、プログラムを指導してくれている先生への信頼と感謝の気持ちが、モチベーションを継続させたというものでした。

彼女の二つの行いは、単にマラソンを完走するという結果を生み出しただけではなく、自らの精神の大きな成長を促したと確信しました。

□ 大切なことは何か

私は彼女のエピソードから、作家でありアスリートでもある村上春樹氏の『走ることについて語るときに僕の語ること』（文春文庫）というエッセイを思い出しました。そこでは、彼のフルマラソンやトライアスロンへチャレンジする経過を述べながら「リスキーなものを進んで引き受け、それを乗り越えていくだけの力が、自分の中にある」ことを確認していく様子が綴られています。例えばこんなくだりがあります。

「苦しいからこそ、その苦しさを通過していくことをあえて求めるからこそ、自分が生きているという確かな実感を、少なくともその一端を、僕らはその過程に見出すことができるのだ。生きることのクオリテ

ィーは、成績や数字や順位といった固定的なものにではなく、行為そのものの中に流動的に内包されているのだという認識にたどり着くこともできる」

私は、この言葉をFさんの経験にあてはめたとき、彼女を讃えるべきは、ホノルルマラソンを5時間台で走りきったという成果だけではなく、そのために後戻りできない状況をつくって、毎日15㎞のランを課し、それを愚直に継続してきた日常こそがフォーカスされるべきだと感じました。これは、生徒たちの部活動や日々の勉強にも同じことが言えるのかもしれません。結果はもちろん大切だけれど、自ら道をつくり、目標に向かっていく行為そのものが尊いことであると。

また、Fさんは看護師なので、きっと彼女の経験によってにじみ出た優しさや包容力が、多くの患者さんに生きる希望や勇気を与えたのではないかと想像しました。ここで私が思ったのは、自らを磨くということは、それは自分のためだけではなく、誰かのためでもあるということです。自らの向上と、他の誰かを輝かせることは一体的なんだ、ということです。

若くもなく、運動能力もない、そんな自分でも成し遂げることができるということを、自ら体現し、その後ろ姿を患者さんに見せることこそが、もしかしたらFさんの本当の目標だったのかもしれません。そして、自らを厳しく鍛えあげることによって、「優しさ」を身につけるということは、実は子どもたちが勉強や部活で学ぶことの本質ではないかと私は思います。

「激しく考え優しく語る」

話は変わりますが、岩手県立花巻北高校の同窓生に山折哲雄先生という宗教学者がおります。先生は花巻北高校創立80周年のときに「激しく考え優しく語る」という言葉を贈ってくださいました。激しく考えるのは自分、そして優しく語る相手がいる。つまり自分が何を体現して、それを他者にどう伝えていくか、という自分から相手に向かう働きかけを、激しい、優しいという表現でとらえている簡潔で力強い言葉です。

今私は、この言葉の中の「激しい」「優しい」という部分に注目して、次の四つのセンテンスを考えてみたいと思います。

まず一つ目。「激しく考えず、激しくあたる」これはダメですね。自分に甘く人に厳しい。人からの信頼を失います。では「激しく考え、激しくあたる」はどうでしょう。もしこれが、教師が授業を行う姿勢だとすると、それは成果を残すかもしれませんが、同時に格差も生み出します。また、生徒の心を育てません。「激しく考えず、優しく語る」はどうでしょう。一見ストレスがなく、いいように思いますが、互いに切磋琢磨し成長を促し合う関係ではないように思います。

そこで「激しく考え、優しく語る」なんですね。自らを磨き、高めていくことが、他者への優しさを生み出すこと。そして周囲や社会を幸せにしていく。Fさんの姿から私はこのことを感じたのです。そして、このような循環を生む対話の場として学校が存在していくことを私は望んでいます。